

2016年6月5日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 19章 41節～20章 2節

説教：ゆずりの地はあるか

あらすじ

ダビデの息子アブシャロムはイスラエルの王の座を奪うために、父親を殺そうと企てます。ダビデはすぐにエルサレムを脱出し、荒野に逃げ延びます。それから間もなく、ダビデにつく者たちとアブシャロムにつく者たちと、国を二つに分けての戦いが始まります。その結果、ダビデは戦いには勝利するのですが、そのためには息子を失うという大きな代償を払わなければなりませんでした。

つらい思いを抱えながらも、ダビデはイスラエルの王として責任があります。いつまでも泣いてられない。エルサレムに戻ることにします。すんなり戻れたわけではありません。いろいろな事件が起きます。それが今日の箇所です。いったいここにどんな神のみこころが記されているのか、考えていきます。

1 戦いは終わったけれど

1) 南のユダの人々 (ダビデの出身部族)

この戦いは、ダビデにつく者たちと、アブシャロムにつく者たちとの間で起きた戦争であったと言いました。もう少し具体的に言えば、ダビデを支持してきたのはユダ族の人々です。週報にダビデの時代のイスラエルの地図を載せましたので、ご覧ください。ユダ族は、地図でわかるようにエルサレムを含んだ南側の地域に住んでいます。ユダ族がダビデを支持した理由は簡単です。ダビデはユダ族の出身だからです。この人たちのことを「南ユダ」と呼んでおきましょう。

2) 北のイスラエル (ベニヤミン人を含む十部族)

一方、アブシャロムを支持してきたのは、国の北側に住んでいた人たちです。イスラエルは十二部族に分かれていたのですが、そのうちの十の部族がこれに該当します。43節で「われわれは、王に十の分け前を持っている」と言うのは、おそらくこの部族の数を指しています。この人たちのことを、国の名前と区別するために「北イスラエル」と呼ぶことにします。

イスラエルの国は、四国ほどの面積だと言われますからそれほど広い訳ではありません。狭いところで、どうして人々はぶつかり合うのだらうと不思議に思うかもしれません。でも、日本でも似たようなものでした。江戸時代、日本は「○○藩」と呼ばれる地域に分けられ、隣同士の藩でいろいろな争いが起きたそうです。そのなごりが今も残っていて、これはJRに勤める親戚に聞いた話ですが、人事異動の時にはこの藩の違いもきちんと考慮してあげないと大変なことになるのだそうです。そうしないと、津軽藩がひいきにされた、いや南部藩がおいしいところをもっていった。そんな話が出てきてけんかになるのだそうです。イスラエルもこれとよく似ています。

3) 衝突

41節を読みます。「するとそこへ、イスラエルのすべての人が王のところにやって来て、王に言った。『われわれの兄弟、ユダの

人々は、なぜ、あなたを奪い去り、王とのその家族に、また王といっしょにダビデの部下たちに、ヨルダン川を渡らせたのですか。』

ここで「イスラエルのすべての人が」と言っているのは、国としてのイスラエルではなく、北の地域のイスラエルのことです。北のイスラエルの人たちが、南のユダ族に文句をつけてきたのです。40節を見ると、ダビデがヨルダン川を渡るとき、北イスラエルの人の半分はいっしょにいたと書かれています。北イスラエルの人々をまったく無視した訳ではないのです。でも、問題にしているのは、王さまがヨルダン川を渡るという大きな行事を取り仕切ったのは、ユダ族であった。そこには北イスラエルは全然関わることができなかった。そのことに腹を立てているのです。

文句をつけられた南ユダの人たちも黙ってはいません。そうやって言い争いが始まります。どちらにも言い分があつて、互いに譲ろうとはせず、だんだん緊張が高まります。そんなとき、ひとりの人物が現れました。

## 2 シェバ

### 1) ベニヤミン人（北の地域）

20章1, 2節を読みます。「たまたまそこに、よこしまな者で、名をシェバという者がいた。彼はベニヤミン人ビクリの子で会った。彼は角笛を吹き鳴らしていった。『ダビデには、われわれのための割り当て地がない。エッサイの子には、われわれのためのゆずりの地がない。イスラエルよ。おのおの自分の天幕に帰れ。』」

シェバはベニヤミン人であったあります。ベニヤミン族は北イスラエルの部族の一つです。そしてまた初代イスラエルの王であつ

たサウル一族でもあります。ダビデがイスラエルの王となるとき、ベニヤミン族の人々は激しく反対して、なんとかサウル家から王さまを出そうとしてダビデと戦ったということがありました。結局ダビデが王になって一旦はおさまるのですが、それから何十年も経っているのに、あのときの不満がぶすぶすとくすぶっているのです。平和なときは表に出て来ません。でも関係がぎくしゃくし始めると、シェバはベニヤミン族が長年心の奥底にかかえてきた不満に火をつけ、国を真っ二つにさせようと盛んにダビデの悪口を言いふらしていきました。

### 2) よこしまな者

聖書はシェバのことを「よこしまな者」だったと言っています。なぜ「よこしま」と言われるのでしょうか。争いを起こすからか。ダビデの悪口を言ったからか。それとも別の理由があるのでしょうか。

シェバが言っている事は単純です。ダビデについていっても、ユダ族だけがいいところを取ってしまい、自分たちには何の分け前もない。何の希望もない。だからダビデについていくな。そういうことを大声で叫びます。

ある本を読んでいて、どんなに嘘であつても、大きな声で何遍も繰り返し言っているうちに人々は本当だと思い込んでいく。そのようにして国を動かそうとする政治家がいるのだと書かれていたのを読んだことがあります。まさにシェバがそうです。北イスラエルの人々に何度もくり返して同じことを叫びます。嘘か本当かは別にして、シェバのことは人々の心を捉え始めます。

この先を読めばわかりますが、ダビデはこのあと、シェバを捜し出し、処罰するよう命

令を出していきます。自分に敵対する者は取り除く。ダビデは、政治家のルールに従って行動したかに見えます。もしそうなら、聖書がシェバを「よこしまな者」と言ったのは、ダビデにたてついたから、という意味なりません。でもそういうことでしょうか。もう少し考えます。

### 3 天の御国

#### 1) ゆずりの地、天の御国

ここで問題となっているのは、割り当て地があるのか、ゆずりの地があるのかどうかです。もっとわかりやすく言えば、「天国」とか「天の御国」があるのかどうか、そういうことです。これは切実な問題です。天の御国という割り当て地をいただくことができるはずだと思って、私たちはキリストについてきたのです。でももしこれが、いや実はあれは嘘でした、あんな約束はした覚えがありません、と言われたら私たちは途方に暮れることとなります。世界で一番あわれな者と言われて笑われるだけでしょう。

#### 2) ゆずりの地はあるのか？

あるいは、こういうことでしょうか。聖書の約束は本当かもしれない。けれども、自分だけは例外だ。自分は約束からはずさされていて天の御国を受け継ぐことはできない。そのように考える方がいます。と言うのは理由があるのです。私は罪をくり返してきたし、今も罪から抜け出せない。私は神さまを信じているかどうか全然自信がない。こんな私が死んで天国の玄関まで行っても、神さまはドアを開けてくださらないに違いない。

表現は違いますが、ゆずりの地は自分にはないと言っているのと変わりありません。ゆ

ずりの地はあるにはあるが、あの人にはあっても、この人にはない、そのような区別があるということでしょうか。

聖書がシェバのことを「よこしまな者」と書いていることに目を留めます。そして、ダビデがこのあとで、徹底的にシェバを捜し出し、シェバを処罰していくことの意味を覚えたいと思います。残酷なようですが、シェバは首をはねられ、その首を城壁の上から投げ落とすと書かれています。なぜシェバはそのような厳しい扱いを受けるのか。

聖書がシェバのことを厳しく書けば書くほど、浮き上がってくるものがあります。何ですか。ダビデにつく者には、ゆずりの地が必ずあるということです。その約束が破られることは絶対にはないと言いたいのです。

#### 3) 天の御国に迎えられる者

いったいどんな者にゆずりの地は用意されているのでしょうか。最後にそのことを確認します。ルカの福音書18章13、14節。「ところが、取税人は遠くに離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。」どこに帰ったのですか。ゆずりの地です。私は罪人で、私は神さまにきらわれるような人間ですと告白した者が天の御国に迎えられたと言っています。

それでも疑いますか。つまり天の御国に入る契約書は信用できるのかどうか。契約書にはいったいだれのサインがありますか。キリストが、十字架で流された血で書かれた主イエスの名前が記されています。日本には血判状というものがありましたが、まさにそれで

す。神がご自分の血でサインした。それ以上のもつと確かなしるしがあるのか。いいえ、世界のどこを捜してもこれ以上確かなサインはありません。

そのサインが記されたところ、十字架に立ち戻りたいと願います。